

# 戦国期の南部氏居城「三戸城」

三戸城は、三戸南部氏により、戦国時代（16世紀中ごろ）、それまで居城としていた聖寿寺館（現南部町）の焼失に伴って、現在の三戸町中央部の独立した段丘に築城されました。城の周りには天然の堀の役目を果たす熊原川・馬淵川が流れる、標高差100メートルの天然の要害でした。

後に居城は福岡城（現二戸市）を経て盛岡城へ移されますが、三戸城は御古城として城代や代官が置かれ、盛岡藩主により大切にされました。

現在は春に約1,600本の桜が咲き誇る「県立城山公園」として整備され、県内外から訪れる人々の憩いの場となっています。



名久井岳中腹からのぞむ三戸城跡



平成16年から発掘調査が行われ、これまでに知られていなかった三戸城の姿が明らかになりつつあります。



南部氏にまつわる史料のほか、縄文から近代まで多くの史料を展示している歴史民俗資料館（左）と温故館（右）



**三戸城現在の石垣（鍛冶屋御門）**  
三戸城は、石垣が4カ所に構築されました。中でも城の表門である綱御門と、裏門である鍛冶屋御門は、城内にたまたた二つの出入口であったため、大規模な石垣が積まれました。近年の調査の結果、石垣は3度にわたって積まれていることが分かりました。最初は九戸一揆後（1591年）に、蒲生氏郷が積んだもの、2回目は不明、3回目は正保3年（1644年）の大地震で崩壊した石垣を修復したものです。特に鍛冶屋御門の石垣は、これまで確認されていなかった場所からも石垣が発見され、三戸城の堅固な防備を裏付けています。



井戸跡：平成17年の調査で家臣の家敷地といわれている場所から検出されました。



26代 南部信直  
時勢を見極めた智将  
天正（一五）～慶長（一五九）

晴政、晴継の相次ぐ死をめぐり家臣団が動揺するなか、当主の座につきます。津輕氏、安藤氏らと戦いながら、豊臣政権に帰参し、九戸氏ら領内の反対勢力を一掃しました。後の盛岡南部家の基礎を築いた信直は「中興の祖」として称えられています。



24代 南部晴政  
一族をまとめたカリスマ当主  
天正（一五）～慶長（一五九）

天文8年（1539）、室町将軍足利義晴から一字を受け、安政から「晴政」へ改名。京都の僧侶に「一段の難」と評されます。糠部郡から岩手郡へと勢力を南へ拡大し、戦国大名三戸南部氏の名を天下に轟かせました。

## 三戸城跡 県立城山公園 案内図



江戸時代の絵図面をもとに復元した三戸城の姿。その地形や屋敷の配置がよくわかります。

